



大自然の魔法師アシュト、 廃れた領地でスローライフ 8

α L P H α L I G H T

さとう

Satou



アルファイト文庫



アルカンシエル

神話七龍の「虹龍」。
見た目とは裏腹に毒舌。
でも意外と常識人。

アマツミカボシ

神話七龍の「海龍」。
おっとりしてるよね。
ごはん美味しいね。

エルミナ

希少種族
ハイエルファの美少女。
どう見えて
大のお酒好き。

ルミナ

黒猫族の少女。
気ままな性格で、
トラブルを起こす
こともしばしば。

アシュト

本作の主人公。
魔法適性が「植物」だった
ために家を追放され、
魔境オーベルシュタインの
領主となる。

シエラ

神話七龍の「緑龍」。
アシュトを
優しく見守る。

アーカーシュ

神話七龍の「天龍」。
シエラのことが好き。
恋愛的な意味で。

主な登場人物

..... CHARACTERS

第一章 アシュトの一日

まきろう
魔境オーベルシュタインの片隅、緑龍の村の村長として日々働いている俺、アシュト。
最近くろねこは黒猫族のルミナという少女と仲良くなるために奮闘したり、仲間と一緒にハイピクシーの花園の危機を救ったりと、何かと忙しい日々が続いていたが……今日は俺の普段の一日を紹介したいと思う。

まず、日が昇ったばかりの朝。ベッドの上でまどろんでいると、ドアが開く。

「にやう。ご主人さま、あさですよー!!」

「わうん!! お兄ちゃん、あさですよー!!」

銀猫族ぎねこの少女ミユアちゃんと、魔犬族まけんの少女ライラちゃんが、俺を起こすために入ってきたのだ。この二人、銀猫族のリーダーであるシルメリアさんに鍛えられているおかげか、寝坊は絶対にしない。決まった時間に俺を起こすのはもはや日課となっている。

俺はベッドから起き、背伸びをする。

「ふあ……おはよう、ミユアちゃん、ライラちゃん」

「にやあ。ご主人さま、温室にいく?」

「フレキたち、もうすぐ来るよ？」

「うん。着替えるね」

「にやああ……」

「くううん……」

起こしに来てくれたお札に、頭を撫でる。

ネコミミとイヌミミを揉み、顎をすりすりしてあげると喜ぶんだよね。

撫で終わると二人は物足りなさそうにするけど、いつまでも撫でてはいられないから仕方ない。

俺は着替え、外へ出る。二人は朝食の準備のお手伝いにシルメリアさんの元へ戻った。

「おはようございます師匠!!」

「ちつす、村長」

「おはよう、フレキくん、エンジュ」

外に出た俺にそう挨拶をしてくれたのは、ワーウルフ族のフレキちゃんとダークエルフのエンジュ。

「まんどれーいく」

「あるらうねー」

『オハヨウ、オハヨウ!!』

「おはようございます。村長」

そして薬草幼女のマンドレイクとアルラウネ、植木人のウッド、そしてフレキくんの妹のアセナちゃんだ。最近、基本的はこのメンバーで温室の手入れをしている。

「みんな、おはよう」

フェンリルのシロにあげるエサをアセナちゃんに渡し、みんなで温室へ向かう。

デリケートな薬草が多いため、日々の手入れは欠かせない。春になって数か月、天気の良い日が続くので、たった一日で小さな雑草が生えてしまう。

温室に到着すると、すでに慣れた作業を開始。

「よし。ウッドは俺と一緒に、マンドレイクとアルラウネはエンジュの手伝いを、アセナちゃんはシロにエサをあげてから、フレキくんの手伝いをよろしくね」

確認するまでもないが、俺は毎朝言っている。

温室は四つあり、俺が二つ、エンジュとフレキくんが一つずつ使っている。

俺の温室が二つあるのは、研究用と薬品用で、栽培する薬草を分けているからだ。

研究用は、異なる薬草同士を配合させて作った実験用の薬草を育てている。失敗も多いが、失敗の先に成功があると信じている。

薬品用は名前の通り。村で治療に使う薬草や、ハイエルフからもらった薬草を育てている。

「ウッド、よろしくな」

『ガンバル!!』

朝の日課はこんな感じだ。

手入れが終わると、朝食を食べるために解散する。

エンジュは一人暮らしで、銀猫族が朝食の支度をしているのだが……

「アセナ、またご馳走になるで」

「構いませんけど……」

こんな感じで毎朝、エンジュはフレキシくんの家でご飯を食べているみたいなんだよな。

すると、アセナちゃんはジト目でフレキシくんを見る。

「うつ、な、なんだよアセナ」

「いえ。別に」

きつと『マカミさんはいいのか?』って思ってるのかも。

エンジュはフレキシくんのことを気に入っていて、わりとオープンに好意を伝えている。

でも、フレキシくんの幼馴染であるマカミちゃんもフレキシくんのが好きで、アセナちゃんはそのことをなんとなく察している。当のフレキシくんはマカミちゃんの気持ちに気付いてないけど。

うーん、三角関係ってやつだ。フレキシくん、頑張れ。

みんなと解散し、新居に戻る。汗を軽く拭いて着替え、ダイニングに向かうと、美味しそうな朝食の香りがした。

「おはよう、アシユト。お疲れ様」

「おはよう、ミュデイ」

「おはよ、お兄ちゃん」

「お兄ちゃんおはよ!!」

「おはよう、シェリー、クララベル」

「おはよう、アシユト。毎朝ご苦労様」

「おはよう、ローレライ。日課だしな。ウッドも手伝ってくれるし楽なものだ」

奥さんのミュデイ、クララベル、ローレライ。そして妹のシェリーもダイニングに集合していた。

朝食の準備はシルメリアさんと、銀猫メイドのシャーロットとマルチェラが担当している。

俺たちが席に座ると、ミュアちゃんに引っ張られてエルミナが来た。エルミナも俺の妻の一人。

「にやう。つれてきた」

「おつはよ……あーお腹へったあ」

「おはようエルミナ。つーかお前、髪ぼっさばさだぞ。また寝坊したんだな」

「う、うっさいわね」

全員揃ったので朝食を食べる。うん、今日もシルメリアさんたちの銀猫ご飯は美味しいです!!

朝食が終わると、それぞれが仕事に向かう。

ミューデイは製糸場、エルミナとシェリーは農園、ローレライは図書館。クララベルは……

「クララベル、今日はどこに行くんだ？」

「ハニエルとアニエルのところ!! あ、の二人、お菓子作りがすごく上手なんだよ!!」

整体天使姉妹のところか。

クララベルはこのところお菓子作りにすっかりハマリ、いろんな種族からレシピを聞いている。

さて、俺も仕事に向かうか。



薬院に入ると、ベッド下からルミナがにゅつと出てきた。

「くああ……」

「ルミナ。まったく……起きるのが遅いぞ」

「みゃう……眠かったんだ。いいだろ、べつに」

ルミナは猫みたいに伸びをして起き、俺に身体を擦り付ける。

仕方ないので撫でてやると、猫みたいに喉をゴロゴロ鳴らした……すっかり飼い猫だな。でもまあ、仕事はちゃんとやるし今回はいいか。

そこにフレキくとエンジュが来る。

「師匠。今日もご指導よろしくお願いします!!」

「おいーっす、よろしゅう頼むでー」

「みゃあ」

この四人が、薬院に勤める薬師だ。ルミナは薬師というか俺の助手だけだな。仕事はまず、薬品の備蓄確認から始まる。これはフレキくんがやってくれる。

その間、俺とエンジュは薬品精製の準備。ルミナに道具の名前を教えながら準備すると、フレキくんが羊皮紙の束を片手に戻ってきた。

「胃腸薬と火傷軟膏、包帯の備蓄も少ないですね……エルダードワーフさんたちの間で金属製品が流行りだしてから、火傷の患者さんが多いです」

「あー、そういえば、置物造りが流行してるんだっけ」

エルダードワーフたち、自分たちの造った置物が魔界都市ベルゼブブで人気があるって知ってから、空いた時間でよく造るようになったんだよな。作業工程で窯を使うらしく、それで火傷の患者が増える。

「アルオエの備蓄は？ あと天然包帯用の薬草」

「んー、どちらもかなり足りていないです。採取可能なアルオエは二日前に採ってしまいましたし……師匠の魔法で成長させてもらえば」

「わかった。あとは胃腸薬か」

「はい。こちらはハイエルフさんたちが大量に使ったようですね……その」

フレキくんはちよつと言いい辛いのか、言葉が濁す。

「えっと、エルミナさんがお酒の試作品を大量に造って……試飲をしたハイエルフさんたちがお腹を壊してるみたいです……」

俺は頭を抱える。あいつ……勘弁してくれよ。

「胃腸薬と整腸剤の備蓄を増やそう。エンジュ、薬草だけで足りないかもしれない」

「ほんなら、腹痛にはクマノイがええで。わかるやろ？」

クマノイ……クマの魔獣の胃のことだな。

「ああ。バルギルドさんたちに頼んで、クマの魔獣を狩ってもらおう」

「よっしゃ。ウチが話をしに行くで」

エンジュは駆け足で出ていった。

「よし、俺はアルオエを魔法で成長させる。フレキくんは薬院で待機。できるなら包帯を作っておいて。やり方はこの間教えた通り……できる？」

「はい!!」

「ルミナは、フレキくんのお手伝い。フレキくんにいろいろ教わってな」

「みゃあ……わかった」

薬院は、こんな感じで忙しい日もある。

お昼を過ぎる辺りから、多少はヒマになる。

午前中は大変だった……火傷したドワーフたち、腹を壊したハイエルフ、鱗がはがれて血が出たサラマンダー族、枝で指を切ってギャン泣きするハイビクシー、爪が割れて泣いてるブラックモール族……いろんな人がやってきた。怪我人が多いよ。でも、お昼になると一段落する。

昼食に薬院の休憩室でシャーロットとマルチェラが作ったサンドイッチをみんなで食べ、一休み。

午後は俺一人、薬院で仕事をする。

エンジュとフレキくんは自分の研究や勉強をする。俺の教育方針として、午前中はしつ

かり仕事をして、午後は自習や研究の時間としていた。

俺もまだまだ勉強不足。一人でみっちり勉強をする。

「でも……」

俺は薬院のベッドを見る。

「みゃう……」

「にやうう……」

ベッドの上では、ルミナとミアちゃんがお昼寝をしていた。

お昼を食べ終わったルミナはベッドの上でお昼寝を始め、お茶を運びにきたミアちゃんも一緒に寝てしまったのだ。シルメリアさんが怒っていたが、俺がそのまま寝させるように言った。

シルメリアさんは不満そうだったが……こればかりは譲れなかった。

だって、見てよ。

「にやあうう……」

「はむはむ……」

ルミナがミアちゃんのネコミミをはむはむしてるんだぞ？

こんな可愛い光景を見られるなんて……しかも、二人の尻尾がくると絡み合っていた。種族は違うが、こうして見ると仲のいい姉妹猫に見えなくもない。

とても癒される……可愛い。

二人が起きるとにやーにやー騒がしくなったが……それも可愛いからいいや。

勉強のあとは、入浴と夕飯。

「さて、今日も一日忙しかったな」

就寝までの間、読書をして過ごすのが日課だ。

実家のビッグバログ王国にいるヒュンケル兄やリウドガ兄さんに連絡することもあるけど、二人とも忙しいので頻繁にはしない。

あと、最近復縁した父上に連絡することもあまりない。やつぱりまだ気恥ずかしい。

「よし、明日も頑張ろう」

本を閉じ、ベッドに潜る。これが俺の日常。薬師として充実している。

「おやすみ……」

よし、明日も頑張ろう!!

第二章 住人たちのお休み事情

「あいつつつ……村長、もちっと優しく頼むぜ」

「はいはい。というか、炬たの中に腕うでを突つっ込むなんてこと、二度としないでくださいよ」

「がっはっは。火傷は職人の勳章くんしょうよ!!」

「はあ……ルミナ、軟膏かんこうを」

「みゃうー」

診察室にいるのは、俺とルミナ、そして鍛冶担当かじのエルダードワーフの職人、バロツゾさんだ。

バロツゾさんはエルダードワーフの移住者の第二……いや、第三陣だったか？　ともかくその時に村にやってきたエルダードワーフの一人で、ミスリル鉱石の加工を得意としている。

マーメイド族と取引しているミスリル製品は、バロツゾさんの造ったものが多く流通している。

作業中に火傷をしたというので診察室に来たら、右腕の肩から指先まで酷ひどく爛ただれていた。当の本人は平然としていたけど。

「みゃあ、動くな」

「おう。ありがとよ、ネコ娘」

「ネコ娘じゃない。ルミナ」

「いっでででで!!」

ルミナはバロツゾさんの腕にぐりぐりと軟膏ぬを塗り込んでいく。

俺は火傷に効くアルオエの葉はを溶かし、複数の薬草を練ねり込み、伸ばして乾燥かんこうさせた天然の包帯を準備した。天然物の包帯なので身体や肌に優しく、治なおりも早くなる。

どんな病氣も治せるハイエルフの秘薬を使ってもいいけど、命にかかわる重傷じゅうけいではない限り使わないようにしていた。

ルミナと交代し、バロツゾさんの指先から腕に向かって包帯を巻き、魔獣の皮で作った頑丈がんじょうな固定具で腕うでを吊つる。

「はい。これで終わりです」

「おいおい、動かせねえぞ。これじゃ風呂も酒も楽しめねえ」

「三日後に包帯を替えますので、それまでお風呂は駄目だめですよ。お酒も駄目。仕事もお休みです」

「なな、なんだとおおおっ!?　ふ、風呂が駄目!?　酒も、仕事も駄目だど!?」

「あ、当たり前ですよ!!　重症ですよ重症!!　笑いながら診察受けてる場合じゃないんですよ!？」

「おおお……そんな馬鹿ばかな」

「鍛冶組かじリーダーのラードバンさんにも伝えておきますからね。約束やぶを破やぶったら……」

「つぐ……わーったよ」

酒と風呂が好きなエルダードワーフにとっては辛いかもしれないが、薬師として強く言った。

「休み……つつても、なにすりゃいいんだ？」

「んー……読書とか」

「どくしょお？」　がはは、オレみてえな学のないエルダードワーフが本なんか読むと思うか？」

「でも、本を読んでもドワーフの方もいますよ。字は読めるんですよね？」

「まあな。カカアに習ったけどよ……」

「じゃあ、試しに行ってみたらどうです？」

「むう……わかった」

バロツヅさんはズンズンと歩いて出ていった。何度も言うが重症患者だ。あんな風に歩いて帰れるわけないんだけどなあ。

それにしても、少しだけ思った。

「休み、か……」

村のみんなは、ちゃんと休みを取っているのかな？



「休み？　交代で取ってるよー？」

ハイエルフの農園で働くメージュに、住人……もとい従業員の休み事情を聞く。

ブドウ農園、果樹園、畑、クリ園と、村の収穫物は非常に多い。ハイエルフの里から持ち込んだ野菜や果物もある。

サポートで入っている派遣の悪魔族たちも交代で休みを取っているらしい。まあこの辺りは秘書のディアーナが上手くやっているのだろう。

仕事は、六日働いて一日休みというサイクルだ。毎日数人が休みを取り、アスレチックや読書などをして過ごしているとか。

「ちなみに、メージュの休日とは？」

「あ、あたしは別に。アスレチックで運動したり、本を読んだり、一日お風呂に入って疲れを癒したり——」

「メージュ、最近は龍騎士団の宿舎に遊びに行ってる」

「……る、ルネア!!」

メージュの背後から、ハイエルフのルネアがニユツと顔を出して暴露。

ああ、そういえば。メージュって騎士団長のランスローといい感じなんだっけ。

「こんのっ!!　変なこと言うなーっ!!」

「く、くええ……くるひい」

「お、おい。ルネアの顔色が紫に……」

メージュはルネアの首を絞め、ルネアはバタパタ抵抗する。この二人も仲良しだよな。とにかく、農園関係の住人はちゃんと休んでいるようだ。



「休みだあ？ おいおい、仕事しねーといい汗流せねえだろうが。美味しい酒を飲むにはいい労働、そして風呂がねえとな!! なあラードバン」

「アウグストの言う通り。ま、たまーに釣りもするが仕事が一番よ」

「おいラードバン、おめーんとこのバロッツが怪我したみてーだぞ。おめえ、ちゃんと監督しとけや。なあマディガン」

「がっはっは。ドワーフに火傷は付きモンだ。なあワルディオ」

「ああそうだ。それよか村長、火酒用の炉を増築してーんだが、いいか？」

……なんかこの人たちに『休め』って言っても無駄かも。

エルダードワーフの最初の五人衆、アウグストさん、ラードバンさん、マディガンさん、ワルディオさんを集めて話を聞いたが、どうも仕事をしないと死んでしまうようなくらい

の勢いだ。目的は酒……美味しい酒を飲むために仕事をしている。

「あれ、そういえばマックドエルさんは？」

「ああ、あいつなら穴倉に戻った。火酒用の燃料を取りにな」

マックドエルさんは最初の五人衆の一人で、エルダードワーフの故郷から道具や燃料を運ぶ係だ。

エルダードワーフの故郷は『穴倉』と呼ばれ、話を聞くとどうも地下にあるらしい。しかも地下には巨大なお風呂があるとか……ちよつと行ってみたい。

「ま、心配すんな。ちゃーんと時々休みながらやるからよ!!」

「は、はあ……あいでっ!？」

アウグストさんが俺の尻をバシッと叩き、この話は終わった。



「休み？ もちろん取ってるんだな!!」と、ブラックモールのポンタさん。

「叔父貴、休みとは一体？」と、サラマンダー族のグラッドさん。

「休み？ わたしたちは毎日遊んでるわ!! お休みなんてないの!!」と、ハイピクシーのフィルことフィルハモニカ。

「……以前よりは仕事が減りましたので。まあ、読書の時間は増えましたね」と、闇悪魔族のディアーナ。

「……オレたちに戦うなど？」と、デーモンオーガのバルギルドさん。

『オラ、モンバン』と、樹木の巨人ファンババ。

『ヤスミ……ソナモン、オレニハカンケイナイネ』と、植物の狙撃員ベヨーテ。

『きゃんきゃんっ!!』と、フェンリルのシロ。

うーん。休んでる人は休んでるみたいだけど、銀猫族みたいに仕事が生き甲斐の人もいるから迂闊に『休んで』なんて言えないな。

俺は村の東屋に座り、一息入れた。

「ふう……」

「ふう……」

「うわっひゃあああつ!？」

耳に熱い吐息……隣を見ると、クスクス笑う神出鬼没のシエラ様がいた。もう慣れたと思ったのに……こうもタイミングを外した不意打ちはズルい。

「こんにちは。アシユトくん」

「ど、どうも」

「ふふ。なにかお悩みかな？」



俺はシエラ様に、現在の村の労働環境について相談することにした。
「ふーん。まあ、焦らなくて大丈夫よ。この村の種族たちはみんな長寿だし、お休みのことを考えるのは千年二千年後でも大丈夫。みんな今の仕事が好きで仕方ないのよ」

「そんなもんですかね……？」

「ええ。それに、私が主催のお茶会だつてまだでしょ？」

そういえば、神話七龍を集めて同窓会を開くとか言ってたっけ。

「ヴォルカヌスがマグマの中でお昼寝したまま起きないのよ。他の子にはお話をしたんだけどねえ……ヴォルカヌス抜きで開くと、あとで怒るだろうし」

「はは……」

「ごめんね。もう少し待ってて。きつと楽しい同窓会になるから!!」

「は、はい」

神話七龍の同窓会なんて、ぶっちゃけ恐怖しかないけど。

でも、今が楽しいのならそれでいいのかな。無理に休ませることがいいことは限らないし、しばらくは様子見でもいいかも。俺だつて自分の時間を大切にしているけど、半日は仕事している。何もしないで休むなんてこと、今まではなかったしな。

「アシユトくん。よかつたら一緒にお茶を飲まない？ シルメリアちゃんに美味しいお茶を淹れてもらいましょ」

「そうですね。では、一緒に行きましょう」

さて、今日の予定は……シエラ様とお茶会かな。

第三章 エルミナのお酒〜未完成〜

エルミナの研究所。

コメから酒が造れるかと言っていたエルミナのために空き家を一軒使わせているのだが、家というより研究所っぽくなっていたのでそう呼んでいる。

俺はメージュ、ルネア、それとハイエルフのシレーヌとエレインを連れエルミナの研究所に来た。

家の中はエルミナの着替えが散乱し、食事の跡も残っている。

壁にはたくさんさんのメモ書きが張られ、大きな机の上には実験道具や実験に失敗したコメの残骸が残っていた。

というか、家の中が臭う……窓を閉め切っているので匂いが籠り、室内はとんでもなく臭い……勘弁してくれ。

足の踏み場もないくらい荒れた部屋で、エルミナは実験を繰り返している。

「あ。みんな!!」

「あ。みんな!! ……じゃないだろ。窓くらい開けろよ」

「ん、ごめんごめん」

みんなで窓を開けると、外の爽やかな風が室内へ。濁った空気が外へ押し出され、新鮮な空気が室内を満たす。

エレインが、部屋を見渡しながら言う。

「エルミナちゃん。お掃除してるの?」

「んー、銀猫たちが何日かに一度掃除してくれてる。毎日掃除するって言うんだけど、実験もあるしあまり荒らされたくないからね」

「ってか、荒らされるとかそういう次元じゃないじゃん」

「う、うっさいわね」

シレーヌのツツコミにそっぽ向くエルミナ。ルネアはエルミナの下着を指でつまみ、顔を歪める。

「汚い」

「さ、触んないですよ!! ってかアシュトは見るな!!」

「わ、わかったよ」

顔を部屋の隅に向けると、そこには小さなネズミがいた。

『よお、来たのか』

「あれ、ニックじゃないか」

ネズミのニック。

古龍の鱗の実験に協力してくれたネズミで、今は村の住人だ。ネズミたちは住居の害虫駆除してくれるありがたい存在となっている。俺はそのうちの一匹のネズミにニックと名付け、目印代わりに小さな首輪を付けてやった。意外と喜んでいたので嬉しかったね。

ニックは、小さな黒光りする虫を掴んでいた。

「そ、それ……」

『ああ。この家、ぼくらには天国だぜ。住みやすいし温かいし虫はいっぱい湧いてるし。今はこの家を拠点にしてるんだ』

「そ、そうなんだ……」

要は、ネズミに好まれる家になっていたようだ。

エルミナを見ると、メージュに部屋の汚さについて叱られている。ニックたちは村の住人だしとやかく言うつもりはないけど、ネズミに好かれる家ってどうかと思う。

「ん、どうしたの村長?」

「あ、いや。なんでもない」

ニックのことは住人に伝えただけ……この家が気に入られているってのは言わなくても

いいか。

それより、なんで俺たちがこの家に来たかと言うと。

「エルミナ、研究もいいけど農園の手伝いもしろよ。最近農園にこないってメージュが心配してたからな」

「べべ、別に心配してないし!! 村長、そこまで言わなくてもいいって!!」

「あ、ごめん」

エルミナは、コメから酒を造る研究に没頭^{ぼつとう}している。でも、なかなか上手くいっていないのか、家でも頭を悩ませていることが多かった。

シレーヌが俺の肩をちよいちよい叩く。

「エルミナ、普段はおちゃらけた能天気娘^{でか}だけど、ああ見えてハイエルフの里では秀才^{しやうさい}なのよ。頭の回転も速いし、若いハイエルフから慕^{した}われてるしね……酒癖^{さけくせ}は悪いけど」

そんなエルミナが悩んでいる……なんとか協力できないかな。

「とりあえず、みんなで部屋の掃除をしよう。環境^{かんげい}が整え^{ととの}ば少しは頭も冴^さえるだろ。いいか、エルミナ？」

「ん……わかった。ありがとう」

というわけで、ハイエルフ娘たちと一緒に、部屋の掃除を始める。

「うげ、汚い……」

「人の下着を汚いって言うな!!」

メージュがエルミナの下着をつまみ苦い顔をした。

エレインが服や下着を籠^{かご}に入れ、外へ洗濯^{せんたく}に出いった。俺とルネアとシレーヌは部屋の掃除を始め、メージュは洗^{せん}いものをする。エルミナは実験道具を整理し、捨ててよさそうなものを選別^{せんべつ}していた。

シレーヌは、窓を拭きながら言う。

「コメから酒ねえ……ほんとにできるの?」

「できる。私はそう思うわ」

エルミナは断言^{だんげん}する。それに対して、床を拭いていたルネアが言う。

「コメ、焼いたお肉やお魚と一緒に食べるの美味しい」

「あー確かにな。焼いた魚の身をほぐして混ぜて食べても美味しいし、サシミを乗せてタレをかけて食べても美味しいよな……あー、今夜のメニュー決まったな」

「いいなあ……村長。わたしも食べたい」

「いいぞ。よかったら今夜、みんなで来いよ」

「うん。ありがとう」

「ちよっとそこ!! 手が止まってる!!」

「わ、悪いエルミナ」

ルネアとまったり話し込んでいるとエルミナに怒られた。

コメは美味しい。それだけでいいと思うんだけどな……酒が造れるかもしれないってのはすごいけど、村には美味しいお酒がいっぱいある。

セントウ酒から始まり、麦を使ったエールや、同じく麦を使ったドワーフの火酒、ブドウから造られる上質な赤、白ワインとか、お酒には困っていない。

エルミナがここまでする理由の一つ……酒が大好きだからだ。

「つと、ん？ ……なんだこれ」

箒で掃き掃除をしていると、本に埋もれるように木箱が出てきた。というかエルミナ、借りた本をこんな扱いして……読書好きのローレライが知ったら怒られるぞ。

俺は木箱を持ち上げ、テーブルの上に置く。

「エルミナ、この木箱は？」

「えー？ なにそれ……忘れたわ。捨てていいわよ」

「中身は捨てるけど、木箱は勿体ないから取っておくぞ」

「いいわよー」

とりあえず中身を確認して捨てようと、木箱の蓋を開けた時だった。

「ん？ ……つうわ!? なんだこれ!？」

中にあったのは、コメだった。

ただし、乾燥して白い糸が引き、カチカチになっている。甘いような、どこかクリミたいな匂いもする……でも、腐っているようには見えない。水分が全て飛んでしまったような状態だ。

「おいエルミナ……実験に使ったコメはちゃんと食えよ」

「あはは、ごめんごめ……」

エルミナは箱の中にあるコメを見て目の色を変えた。

そして、俺を押しつけ木箱のコメを掴み、手でほぐす。

「……これ、今まで見たことのない反応だわ。アシュト、これ」

「し、知らないぞ。本に埋もれた木箱の中にあつたコメだ」

「……クリミたいな匂い。それに、甘さもありそうね……うん、これ、お酒に使えるかも!!」

「え、エルミナ？」

「ありがとうアシュト!! 大好き!! んーちゅっ♪」

「おっぷ!？」

エルミナは俺に抱きつき、思いきりキスをした。

放心していると、エルミナは片付けた実験道具を引っ張り出す。するとシレーヌが隣に

来た。

「よくわかんないけど、スイッチ入ったね」

「え？」

「エルミナ、何かわかったみたいだよ」

メージュとルネアも頷く。

「ま、農園に引つ張り出すのはまた今度でいいや……あんなったエルミナは止まんないしね」

「うん。メージュ、エルミナのことわかってる。さすが一番の親友」

「う、うっさいルネア!!」

「うぐぐ……」

メージュはルネアの頭を脇で抱え、思いきり締め上げる。

そこに、部屋のドアが開きエレインが洗濯から戻ってきた。

「戻りましたー あら、みなさんどうしたんですか？」

「ん、エルミナのスイッチ入ったみたい。とりあえず……あたしらは帰ろっか」

シレーヌが部屋を出ると、エレインや、ルネアの頭を絞めているメージュも出ていった。

エルミナはもう、俺たちのことは見えていないようだ。実験道具を片手にとびきりの笑顔を見せている。

「ふう……頑張れ、エルミナ」

エルミナの酒造りは、まだ始まったばかりだ。

第四章 銀猫たちの戦い

アシウトに忠誠を誓う銀猫族。彼女たちは銀猫族専用宿舎で寝泊まりしている。

毎朝早くに起き、特定の住人の世話をするのが主な仕事。世話の対象は主にドワーフたちだ。ドワーフは家事能力が皆無なので、銀猫たちが食事や掃除をしているのである。

それとは別に、村の施設関係は銀猫たちが管理をしているのも多い。

銀猫族のリーダーはシルメリア。

その補佐にマルチェラとシャーロット。

この三人は数いる銀猫たちの中でも別格。見た目ではわからないが年長者であり、他の銀猫たちが小さい頃から面倒を見てきたのである。そのため、この三人がアシウトに仕えるのは当然だ。

アシウトの家のすぐ傍にある使用人の家にはシルメリア、補佐のシャーロットとマルチェラ、シルメリアからいろいろ教わっているミユア、薬草幼女のマンドレイクとアルラ

ウネ、魔犬族のライラ、そして少し扱いは違うが黒猫族のルミナが住んでいる。

この家に住めるのは光栄なことであり、アシウトの傍で仕事をする彼女たちは、銀猫たちにとって羨望せんぼうの的まとであった。

そんなある日。銀猫たちに、チャンスがやってきた。



深夜だが、銀猫たちの宿舎は明るい。全員が一階に集まっているのだ。

全員が寝間着姿で会話はない。朝食会場でもある一階ホールにはテーブルが並び、全員が静かに座っている。

静かだが、彼女たちは一様に尻尾が動き、ネコミミがピコピコ動いている……見る者が見れば銀猫に落ち着きがないのはあきらかだった。

そして、宿舎のドアが開く。

「遅くなりました」

給仕服に身を包んだ銀猫、シルメリアだった。

アシウトの屋敷での仕事を終えて来たのである。まだ入浴も済ませておらず、態度や顔には絶対に出さないが、やや疲れているようだ。シャーロットとマルチェラがいなのは、

アシウトの家で留守番るすばんをしているからである。

銀猫たちは立ち上がり、シルメリアに頭を下げた。

「お待たせして申し訳ありません。では、さっそく始めましょう」

そう言ったあと、シルメリアは全員がよく見える位置に移動した。

「では、ご主人様のお仕え銀猫を誰にするかを決めたいと思います」

アシウトのお仕え銀猫はシルメリア、シャーロットとマルチェラ、そしてミユアの四人だが、最近仕事の量が増え、四人だけでは手が回らなくなってきたのである。

そこで、もう一人補佐を選び、使用人の家に住ませることにした。朝はそれぞれの仕事があるため、誰がアシウトの家で仕事をするのか選ぶのは深夜となった。

シルメリアは、とりあえず聞いてみる。

「では、立候補……聞くまでもありませんね」

立候補と言った瞬間、全員が挙手した。それはそうだ。ご主人様のアシウトが住む家は銀猫たちにとって最高の職場。誰もが望む仕事である。

困ったことに、銀猫たちの家事の技量は同じレベル。ぶっちゃけ誰でもいい……とは言えないシルメリア。そのため、最も求められる家事能力ではない技量に目を付ける。

「では、戦闘能力……ではなく、『運』で決めましょう」

ご主人様に対する愛を比べて争あそうことは無意味。なら、銀猫一人一人が持つ運の強さで

勝敗を決めるしかない。

以前、アシウトとシェリーがもめていた時にやった方法で決めることにした。

シルメリアは、事前に準備していた箱をテーブルの上に乗せる。

「では、これより『クジ』で決めたいと思います。一人一つ、この箱の中にあるクジを引いてもらいます。そして私が引いたクジと同じ模様のクジを持つ銀猫を補佐に任命します」

「……………」

銀猫たちは静かに頷く。

どんな時でも、不必要に騒がない。彼女たちは淑女の心得を備えていた。だが、尻尾とネコミミだけは正直に動いている。

「では、一人ずつお引きください」

シルメリアの前にある箱から、銀猫たちは一人ずつ折り畳まれた小さな羊皮紙を引く。

全員が羊皮紙を引き終わったのを確認したシルメリアは別の箱を取り出す。

「こちらの箱から一枚引きます。私が引いた模様と同じ模様を持つ銀猫が、新しい補佐です」

「……………」

ぴくぴくと、ネコミミが揺れる。

シルメリアは箱に手を入れ……一枚の羊皮紙を取った。

そしてそれ開き、全員に模様を見せる。

「こちら、ミュアが書いた『ネコ』模様を持つ銀猫が、新しい補佐です。確認を」

羊皮紙には、可愛らしいネコが書かれていた。このクジはミュアやライラたちが作ったものだ。

銀猫たちは一斉に折られたクジを開き……

「……私です!!」

一人の銀猫が拳手をした。



新居の自室で読書をしていると、一人の銀猫がティーカートを押して入ってきた。

ミュアちゃんかなと思ったが、俺と同じ年くらいの見た目で、長い銀髪を三つ編みにした銀猫だ。

「あれ？ メイリイじゃないか。どうしたんだ？」

「はい!! 本日より使用人の家に住むことになりました。これからはシルメリアさんの補佐として、ご主人様のために働きます!!」

「そっか。よろしくな」

メイリイは嬉しそうに尻尾を揺らし、ネコミミもぴくぴくさせながらお茶の支度をして

いる。

今日のお茶はカーフィーとクララベルの作ったクッキー。読書しながらのカーフィーは最適だ。この苦みがなんともいえない。

「ご主人様、お茶です」

「ありがとう」

俺専用のカップに真つ黒なカーフィーが湯気を立てている。

クッキーも焼き立てだ。マーブル模様で砂糖がまぶしてあるクッキーで、クララベルのお菓子作りの腕前が上がっていることがわかる。

さっそく一つ齧る。

「うん、美味しい」

「クララベル様、毎日お菓子作りを頑張ってるみたいです。ナナミの作ったジャムを分けてもらいに来たこともありますよ」

「へえ、銀猫のナナミのジャムか。頑張ってるんだな……あ、メイリイちよつと来て」

「はい？」

俺はクッキーを一つ摘まみ、メイリイの口の中に入れた。

「不意打ち成功。味はどう？」

「ふ、ふにやつ……おお、おいしいです!!」

「よかった。おっと、シルメリアさんには内緒な？　こんなの見られたら怒られる」

「にやうう……は、はい」

メイリイは顔を真つ赤にしながらか、ティーカートを押していった。

ちよつと悪戯してしまった……悪いことしたかな？

「ま、うまいからいいや」

俺はもう一つクッキーを齧り、カーフィーを味わった。



「にやうう……えへへ、ご主人様に食べさせてもらっちゃった」

メイリイは幸せだった。補佐に入って一日目でさっそくアシュトに甘やかしてもらったのである。

アシュトの笑顔に癒され、クッキーの甘さに酔いしれる。

クジ運に恵まれたことに感謝し、ティーカートを押してキッチンへ。すると、シルメリアが昼食の仕込みをしていた。

「メイリイ、こちらの手伝いをお願いします」

「はい!!」

「……なにかありました？」

「いい、いえ別に……」

「……」

メイリイは汗を流し、シルメリアから視線を外す。

シルメリアはメイリイを見て、にっこり笑った。

「メイリイ、口にクッキーの食べかすが」

「にやつ!?」

「付いていませんが……なるほど、補佐初日につまみ食い……いえ、ご主人様に食べさせてもらったのですね？」

「……」

冷や汗をダラダラ流し、メイリイは引きつった笑みを浮かべた。

「まあ、いいでしょう。でも、他の銀猫に知られたら羨ましがられますね」

「うう……き、気を付けます」

「はい。では、こちらの手伝いを」

「はい!!」

シルメリアは、厳しくも優しい。

こうしてメイリイは、アシュトの新しい使用人となった。

第五章 エルミナのお酒〜ふとしたきっかけ〜

「ん……もう少しなんだけど」

エルミナは一人、研究所で悩んでいた。

コメから酒を造る仕事を始めて数か月にして、コメの研ぎ汁のような乳白色の酒ができた。

もちろん、これもれつきとした酒だが、甘味が強すぎる。エルミナはそこが不満だった。器具を置き、着替えや下着が脱ぎ散らかしてあるソファに座る。

「はあ……アシュトには怒られるし、酒造りは上手くないし……疲れた」

乳白色の酒を住人たちに味見させすぎて、腹を壊す者が続出。さすがにやりすぎだとアシュトに叱られてしまったのである。

悩むエルミナの肩に、首輪を付けた一匹のネズミが乗る。

『よう、悩んでるみたいだな』

「ニック……害虫駆除ありがとね」

『気にすんな。それより、美味しい酒を頼むぜ』